（第３種郵便物認可）　福井

巡行する人形山車の各当番区は16日、各山車蔵で山車の展示を始めた。三国祭期間中も巡行日の20日を除き21日の最終日まで勇壮な山車を鑑賞できる。

政」、三国祭保存振興会の「遮那王と武蔵坊」、滝谷区の「真田信繁」、上西区の「水戸光圀」、南末廣区の「羅生門の鬼」の6基が巡行する。

区民はもちろん観光客

展示されている南末の鬼」＝16日、坂井市丁目

旧金津出身の早世詩人

舘高重 創作世界触れて

命や家族愛 30編朗読

21日 あわらで有志企画

旧金津町出身で27歳の若さで亡くなった昭和初期の詩人舘高重（1904～31年）の詩の世界を地元の人に知ってもらおうと、あわら市などの有志による朗読会（福井新聞社後援）が21日午後1時半から、同市中央公民館で開かれる。フルートやハープの演奏に乗せて遺族らが約30編を披露する。（山崎彩）

遺族が91年に刊行した「舘高重詩集」によると、舘は生まれた翌年に母親を亡くし8歳のときに継母を迎えた。18歳で父親が死亡、28年4月に結婚したが同年7月に妻を病気で亡くした。舘も病気を患い療養中に詩を書き、はかなく尊い命や家族への愛などの思いを込めた。舘の代表作の一つで、詩人として夢を追う若い心を表した「魚」は、父親にしかられながらも「今に見ろ　でかい魚を釣ってみせるから」（同詩集より抜粋）と勢いに満ちている。

戦後の本県文壇の礎を築いた詩人、故則武三雄さんは舘について「明治の暁が（北村）透谷、（島崎）藤村にあったように、本県の場合は昭和初期にその契機があったのではないだろうか。舘高重はその頃の最も新鋭なチャンピオンであった」（同詩集の帯より）と称賛。詩人の故広部英一さん（福井市）は同詩集のあとがきに「その詩精神の燃焼の烈しさは、まさに驚異の一語に尽きる」と述べている。

朗読会は、ゆかりある人や市内の郷土史を学ぶ人たちで結成した「舘高重を偲ぶ会実行委員会」が、昨年末から企画してきた。遺族らが詩を読み上げ、舘について紹介する。広部さんの弟で演奏家の正雄さんによるハープ演奏や、フルート演奏にのせて朗読。舘の「孤独感と人生の悲哀」（広部さんのあとがきより）を込めた詩を鑑賞してもらう。

牧田孝男会長（67）は「命と向き合う姿や、家族への愛が表れている詩を多くの人と共有し楽しみたい」と話していた。

定員は約200人、入場無料。問い合わせは牧田会長＝☎090（1635）5710。

27歳で亡くなった舘高重の詩集と牧田会長＝16日、あわら市内

ど、迫力のある仕上がりになった」と話していた。

20日は正午ごろまでに三國神社前に6基の山車が集合、午後1時に出発し同日夜まで旧市街地を練り歩く。（久保和男）

て年1回開

代表の古

の「龍翔館

は、桜が満

る枝の間か

や、特徴的

館の外観を

少子化対策に力

大野 今副市長、着任

大野市が内閣府から副市長に迎えた今洋佑氏（33）が16日、着任した。今副市長は市職員へのあいさつで、地方創生や少子化対策に重点的に取り組む姿勢を強調し、「率直に意見交換して政策を練り上げたい」と意気込みを語った。

今副市長は北海道出身、東京大大学院工学系研究科修了。地方行政に携わるのは初めてという。

あいさつでは、市職員120人を前に「北海道から東京に出て都市の）バ

ていない状

を持ってい

をぶつけた

また取材

市の印象を

ち着いて

方創生は、

いる人がメ

ることが重

外へとアプ

い」と語っ

同市の副

育太氏と2

る。